真鶴まちなーれ2021

本小松石をヤーンボミングする

Yarn bombing
Komatsu stone.

文化は人をつなぐ
Culture Connects Us

2021.11.20sat~11.28san
10:00~17:00

真鶴港
Manazuru Port

入場無料
Free admission

●主催：真鶴まちなーれ実行委員会
●後援：真鶴町、真鶴町教育委員会、
真鶴町観光協会、真鶴町商工会
●協力：神奈川県石材協同組合、同青年部、
あみあみ会に参加いただいた方々

●お問い合わせ
真鶴まちなーれ実行委員会
Tel：090-9101-1246（事務局）

ガイドブック￥500
Guidebook 500 yen

ツナグ
TSU NA GU

MANAZURU MACHINALE

01
石工

ツナグ
TSU NA GU

ツナグプロジェクト
真鶴まちなーれ実行委員会

文化は人をつなぐ

文化は私たちが互いを理解し、
共に共感できる目的を見つけてそれに向かい、
喜びや悲しみや驚きを経験し、
その経験から新しい現実を創造する方法みつけることです。
それは、文化には芸術だけでなく、
人間が作り出したあらゆる産業、
人文科学、科学、医学、農業、デザイン、食など、
私たちが生きていくために探求し、
創造するすべての方法が含まれているからです。

石工　stonemason

写真は、真鶴の石工の方々

石工（石切）の道具

小松石とは火成岩の中の安山岩です。
箱根火山の活動により今から40～15万年前に流出した溶岩よりできた
半深成岩です。
分かり易くいえば溶岩が比較的早く冷却し生成した岩石です。
わが国の安山岩中、石質は堅硬、耐久性、
耐火力には花崗岩よりも強い点が特色です。
また、小松石は山から切り出した状態では表面が酸化し赤褐色を呈して、
自然石で形のよいものは庭石、記念碑、飛石、に使用され
関東地方や東海地方には、その遺蹟を数多くみることが出来ます。
この岩石を角材にし研磨すると、小松石独特の灰色、
淡灰緑色の緻密な石面が現れ柔らかな光沢を発し高級な墓石に使用されます。
本小松石は、神奈川県の真鶴半島周辺に位置する
真鶴町で採掘されている石です。
香川県の庵治石と並んで、国内の墓石用石材の中でも最高級品という
評価をいただいています。
戦国時代は、後北条氏が関東一円に広大な領土を有していましたが、
その多くの城が、土塁と空堀（水のない堀）で作られていました。
その後、徳川幕府の時代となってから、関東の城郭には、
石垣が多用されるようになりました。
石を採掘する山、採石場のことを「丁場（ちょうば）」と呼びますが、
真鶴町が、本小松石の丁場として有名になったのは、
ちょうど江戸幕府が始まった頃からです。

写真は、江戸城の石垣

ツナグハ
TSU NA GU

石工（石切）の道具 02「セリ矢」

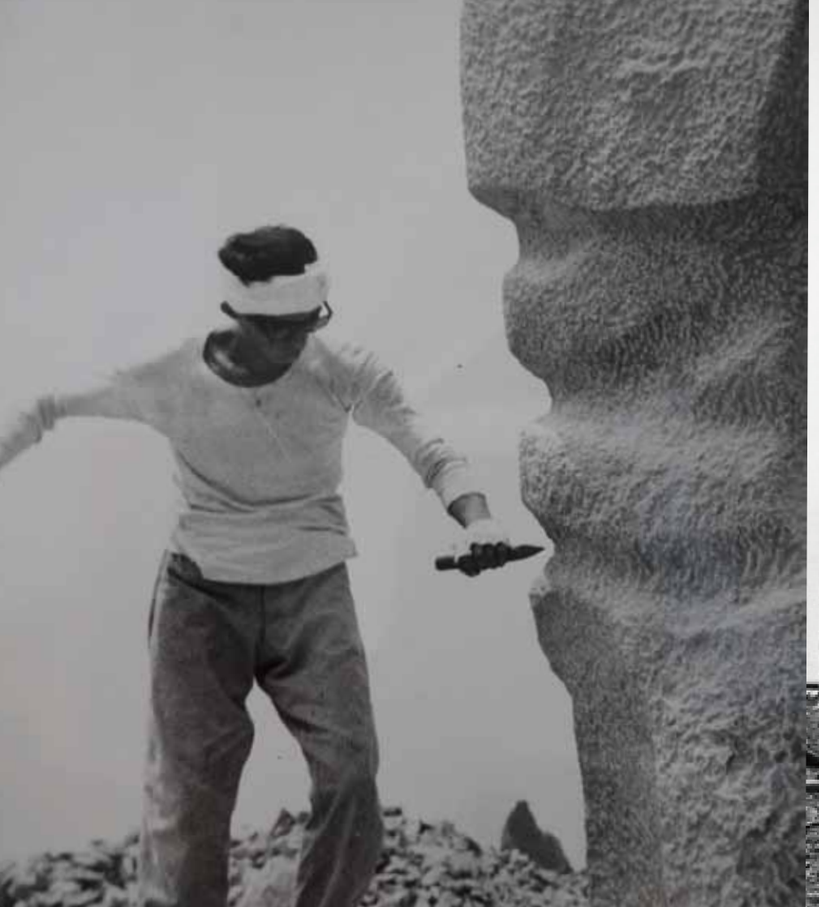
小松石とは火成岩の中の安山岩です。
箱根火山の活動により今から40～15万年前に流出した溶岩よりできた
半深成岩です。
分かり易くいえば溶岩が比較的早く冷却し生成した岩石です。
わが国の安山岩中、石質は堅硬、耐久性、
耐火力には花崗岩よりも強い点が特色です。
また、小松石は山から切り出した状態では表面が酸化し赤褐色を呈して、
自然石で形のよいものは庭石、記念碑、飛石、に使用され
関東地方や東海地方には、その遺蹟を数多くみることが出来ます。
この岩石を角材にし研磨すると、小松石独特の灰色、
淡灰緑色の緻密な石面が現れ柔らかな光沢を発し高級な墓石に使用されます。
本小松石は、神奈川県の真鶴半島周辺に位置する
真鶴町で採掘されている石です。
香川県の庵治石と並んで、国内の墓石用石材の中でも最高級品という
評価をいただいています。

写真は、セリ矢と道具類

新たな挑戦

小松石とは火成岩の中の安山岩です。
箱根火山の活動により今から40～15万年前に流出した溶岩よりできた
半深成岩です。
分かり易くいえば溶岩が比較的早く冷却し生成した岩石です。
わが国の安山岩中、石質は堅硬、耐久性、
耐火力には花崗岩よりも強い点が特色です。
また、小松石は山から切り出した状態では表面が酸化し赤褐色を呈して、
自然石で形のよいものは庭石、記念碑、飛石、に使用され
関東地方や東海地方には、その遺蹟を数多くみることが出来ます。
この岩石を角材にし研磨すると、小松石独特の灰色、
淡灰緑色の緻密な石面が現れ柔らかな光沢を発し高級な墓石に使用されます。
本小松石は、神奈川県の真鶴半島周辺に位置する
真鶴町で採掘されている石です。
香川県の庵治石と並んで、国内の墓石用石材の中でも最高級品という
評価をいただいています。

写真は、本小松石を使った●●●旅館と商品



１９６３年「世界近代彫刻シンポジウム」真鶴で開催

「世界彫刻シンポジウム」はユーゴスラヴィアやオーストリアで開催され大きな成果をあげたが、
日本で初めてのオリンピック開催の前年、朝日新聞社主催のもとに
神奈川県真鶴の道無海岸で３カ月間開かれた。
参加者は、富永惣一氏を委員長とする選考委員会によつて選ばれた日本側６名の他、
外国側５カ国６名。作品は東京新宿御苑に運搬され、
全作品 15 点が 10 月 5 日から 31 日迄公開され、
更に明年、オリンピックには、スタジアムの周辺を飾った。
現在は大阪富田林 PL 教団に展示されている。
作家の一人である水井康雄氏は「斬新な催しと朝日新聞が主催となってくれ、私の夢は実現した。
宮城の石崖を作った真鶴半島の新小松岩（安山岩）で、花崗岩ほどではないが、大変粘く硬い。
私はずんぐりとした原石を二つのボリュームの抱合として、
中央を帯や溝で締め上げる造詣と方針を決めて取り込んだ。
この海岸を道無海岸と呼ぶが、その道無しを題名にしたのは、
使った帯や溝が全部どこかで中断している。
これはいくら大石を切り刻んでも、原石の強さを失わないための必然造形だからである。」
作家達は近隣のホテルや旅館に合宿して、早朝から夕日が落ちるまで、
重量十トンを超える 真鶴の安山岩・新小松石の巨石と取っ組み、
真夏の強烈な白日の元制作にあたった。
会場では、参加者の国籍を示す６カ国の国旗が立てられ、
作家が鑿や槌で石を砕いたり引いたりするフォルムを
徐々に作品に仕上げていくところが
芸術のオリンピック さながらであったとされている。

写真は、神奈川県の道無海岸で作品“道無（みちなし）”を作製中の水井康雄氏と他の作家や関係者たち。